

ダイズのフタスジヒメハムシに対するチアメトキサム水和剤 (商品名：クルーザーFS30) の種子塗沫処理の効果

古川農業試験場

1 取り上げた理由

ダイズ栽培において、フタスジヒメハムシによる莢の加害は、黒斑粒や腐敗粒の発生原因となり子実の品質低下をもたらす。近年の大規模水田輪作によるダイズ栽培では、作付年数に関わらずフタスジヒメハムシによる子実被害が発生しており（普及に移す技術第82号）、フタスジヒメハムシを主体とした防除が重要となる。新規に開発されたチアメトキサム水和剤(商品名:クルーザーFS30)のフタスジヒメハムシに対する防除効果を検討したところ、高い防除効果が明らかとなったので普及情報とする。

2 普及情報

- 1) チアメトキサム水和剤の種子塗沫処理は、発芽直後に侵入するフタスジヒメハムシの成虫に対し高い防除効果を示し、次世代以降の成虫密度も低く抑えられることから、被害粒の発生を抑制できる（図1，2，表1）。
- 2) 本剤は、ジャガイモヒゲナガアブラムシに対しても防除効果が認められる（図3）。

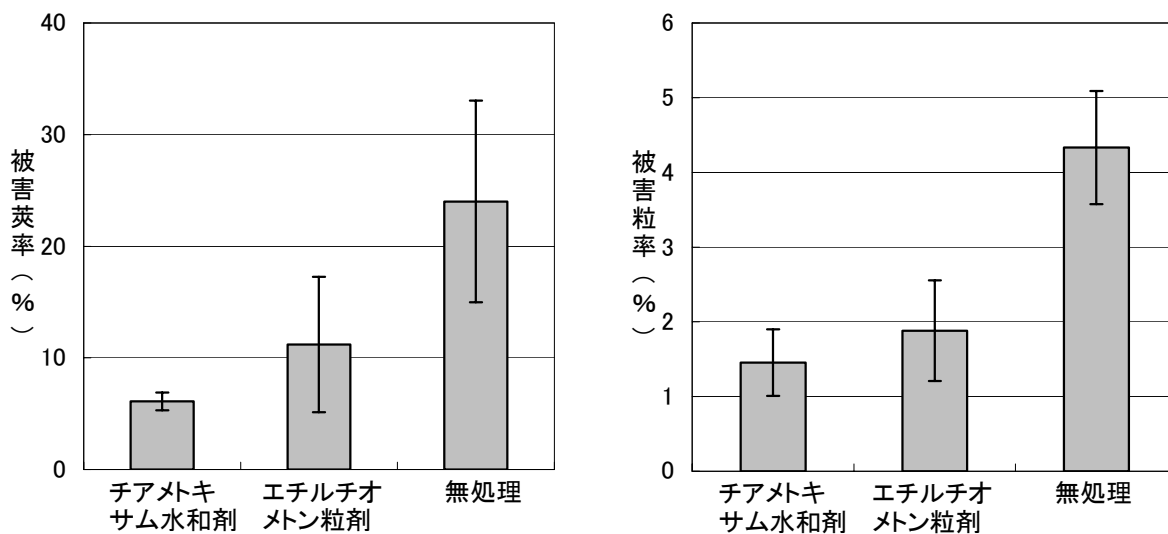


図1 チアメトキサム水和剤の種子塗沫処理のフタスジヒメハムシに対する防除効果

注1)チアメトキサム水和剤:6ml/種子kg種子塗沫処理, エチルチオメトン粒剤:4kg/10a播種溝処理

注2)図中のバーは標準誤差

3 利活用の留意点

- 1) チアメトキサム水和剤を乾燥種子に対し均一に塗沫処理し、処理後十分に風乾する。処理した種子は、保存方法により発芽率が低下することがあるので、できるだけ播種直前に処理する。
- 2) 他の種子処理剤（殺菌剤、鳥害防止忌避剤等）を併用する場合は、比較的乾燥が速いチアメトキサム水和剤を先に処理した後に他剤を処理する。

(問い合わせ先：古川農業試験場作物保護部 電話0229-26-5108)

4 背景となった主要な試験研究

1) 研究課題名及び研究機関

大規模水田輪作におけるダイズの総合的有害生物管理(IPM)のための主要病害虫制御技術の開発
(平成 16~20 年度)

2) 参考データ

表1 チアトキサム水和剤の種子塗沫処理によるフタスジヒメハムシ越冬世代成虫に対する防除効果

試験区	成虫数(頭)		被害小葉率(%)	
	6/16	6/26	6/16	6/26
チアトキサム水和剤	0	0	5.6	1.9
エチルチオメトン粒剤	0.5	0	9.4	3.8
無処理	13	6	96.9	62.8

注1)成虫数は100株当りの頭数(見取り調査)

注2)被害小葉率は各区40茎調査。初生葉は1枚と数え、子葉は含まない

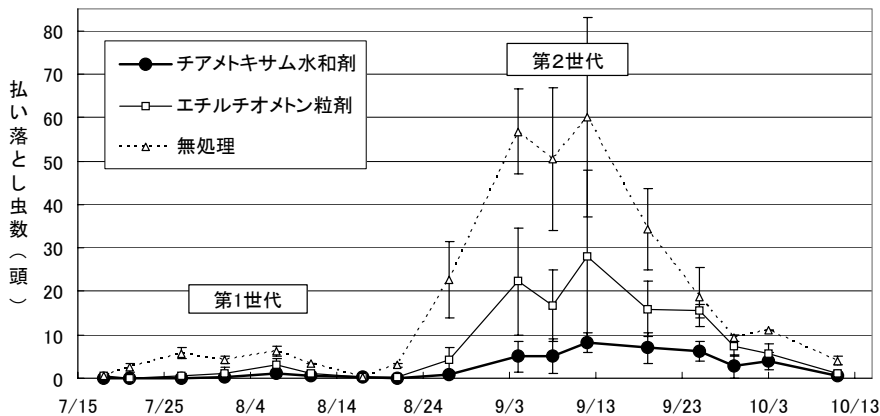


図2 チアトキサム水和剤の種子塗沫処理によるフタスジヒメハムシ第1, 第2世代成虫の発生への影響

注1)払い落とし(畦間に80cm×150cmの白色寒冷紗を広げ両側の株を棒で叩く)による成虫数を示す。各区2カ所、2反復の平均値。

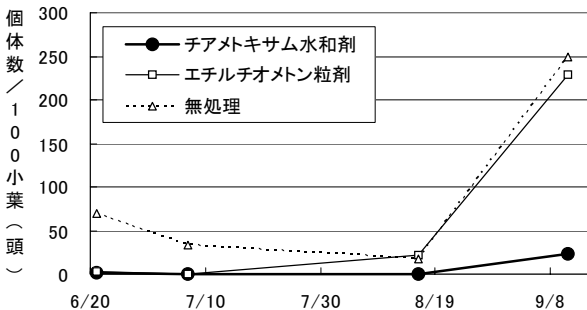


図3 チアトキサム水和剤の種子塗沫処理によるジャガイモヒゲナガアブラムシに対する防除効果

表2 チアトキサム水和剤(商品名:クルーザーFS30)の使用方法(平成20年2月1日現在)

作物名	適用害虫名	使用量	使用時期	本剤の使用回数	使用方法	チアトキサムを含む農薬の総使用回数
だいず	アブラムシ類 タネバエ ネキリムシ類 フタスジヒメハムシ	乾燥種子 1kg 当たり 原液 6ml	播種前	1回	塗沫処理	3回以内(播種前の塗沫処理は1回以内、播種後は2回以内)

3) 発表論文等

a 関連する普及に移す技術

a)ダイズにおけるフタスジヒメハムシの発生消長とエチルチオメトン粒剤による防除(第81号参考資料)

b)大規模水田輪作ダイズにおける害虫被害の発生実態(第82号参考資料)